#吉岡進の新世代沖釣り紀行 vol.21

ツリガチ! TSURI GACHI

東京湾のタチウオジギング

文◎高橋 剛

★「こんなに釣れていいものか……!?」慣れない好釣果に、思わず顔を見合わせるツリガチ取材班。苦戦を覚悟して臨んだ冬の東京湾タチウオジギングは、まさかのドラゴン連発！　ジャッカル・アンチョビメタルの各タイプを使い分けながらアタリを引き出し、ガチで釣りまくるヨッシーであった。

「ジグは120グラムを中心に、なるべく動かないものを選んでみてくださいね」

出港前に、東京湾奥長浦・こなや丸の進藤通孝船長が言った。進藤船長は、東京湾でタチウオを最も釣らせてくれる船長の一人。その言葉に、ツリガチ取材班が思わず耳を傾ける。

「シャクリも必要ありません。タダ巻きでOKですよ」

動きのないジグをなるべく動かさないことが、今の東京湾タチウオジギングでは効果を発揮するようだ。

ジャッカル・プロスタッフ、吉岡進の目が光る。ヨッシーの愛称で知られるこの男、タチウオ釣りにかけても天下一品の腕前の持ち主である。ジグ選びの眼差しがひときわ真剣味を増している。

★1投目に当日最大132センチが上がった

1月27日、6時7分。エメラルドグリーンが特徴的なこなや丸が長浦港を離れた。どんよりとした曇り空。冷たい風。暗い緑色の海にギラリと輝くタチウオが潜んでいるかと思うと、期待に胸が高鳴る。

その期待は、裏切られなかった。それどころか、期待を大きく上回るオープニングとなったのである。

7時半、猿島沖の水深50メートル前後で釣りが開始されるや、ツリガチ取材班が釣り座を構えた右舷とは反対側、左舷ミヨシのお客さんのロッドがいきなり大きく曲がった。

かなり強い引きだ。いつもかしましいツリガチ取材班が「おお～っ！」と叫び、船中の注目が集まる。落ち着いたヤリトリの末に上がってきたのは、なんと指幅7本級、134センチのドラゴンだった。

その口元には、ジャッカル・アンチョビメタルTYPE-Ⅰ。タチウオジギングのベーシックモデルで、リアバランスで速いフォールスピードを特徴としている。

ポイントに到着した直後、1投目からいきなりのドラゴン登場である。これはまさかの緊急事態。こなや丸は色めき立ち、かじかみつつリールを巻く手に力が入る。

いきなりクライマックス!? 指幅6本級のドラゴン降臨

そのわずか5分後、

「あっ……」と弱よわしい声を上げたのは、ツリガチ取材班のライター、タカハシゴーである。

「んっ……？　あれっ？　バレちゃったかな……」

竿先を眺める不安げな表情。リールを巻く手から力が抜け、巻きスピードが遅くなっている。

「付いている付いてる、巻いて巻いて！」とヨッシーが叫ぶ。タチウオによく見られる、食い上げだ。

ハッとして、全速力でリールを巻くタカハシゴー。ベイトリールから火を噴きそうな勢いで巻き続けながら、

「あっ、やっぱ付いてる！」と手応えを感じたようだ。ついさっきのドラゴンほどではないが、立派な1本を釣り上げた。130グラムのアンチョビメタルTYPE-Ⅲ。アクションが少なく繊細な誘い上げが可能なジグを巻いている途中に、ゴンときた。

「タチウオはフッキングした後に上に向かって泳ぐことが多い魚なんだよ。

手応えがなくなってバレたかと思うけど、そこでリールの巻きスピードを下げちゃいけない。ジグの重みでフックオフしちゃうからね」とヨッシー。

そう言いながら、タカハシゴーと同サイズのタチウオを釣っている。130グラムのアンチョビメタルTYPE-Ⅰだ。

その10分後、ツリガチ取材班のマスコットキャラクター、イチロウこと鹿島一郎さんが指5本を釣る。ジグはヨッシーと同じ、TYPE-Ⅰ。

ほぼ同時に、ヨッシーも大きくロッドを曲げた。指幅6本級、126センチのナイスサイズだ。

「巻き上げて、クラッチを切ってフォールした瞬間に食ってきたよ」と、満面の笑みを浮かべるヨッシー。

船中のあちこちで鋭いシルバーのきらめきが見え、静かな歓声が聞こえる。

「うん、今日は釣れる」と見たヨッシーは、いったん自分のロッドを置き、左舷胴の間の釣りガールたちのもとにはせ参じた。出港前、「ヨッシーのファンなんです」と衝撃の告白をしてくれていた二人だ。

釣りボーイとして、放っておくわけにはいかない。本橋愛子さんと松井香菜子さんは、釣り友だち。二人ともタチウオジギングは3回目だという。二人の間に立ち、ヨッシーがアドバイスする。

「ジグはなるべく動かさないほうがいい。ジグが暴れてしまうと、タチウオが口を使いづらくなるからね。

ロッドでアクションしようとするとジグは暴れすぎる。リールの巻きの中で緩急をつけて。巻いて巻いて、一瞬止めたときに食ってくることが多いよ」

本橋さんは、ジグをフォールさせるときに竿先が跳ねてしまっている。ジグも暴れながら落ちているだろう。

「サミングを意識して。スプールを親指で触るか触らないかの微妙なタッチでOKだよ。

……ほら、竿先が落ち着いたでしょう？」

一方の松井さんは「知人に誘ってもらって釣りを始めたのが、1年前かな。すっかりハマっちゃって、今は週一回は釣りしてる（笑）」と、手慣れた様子だ。

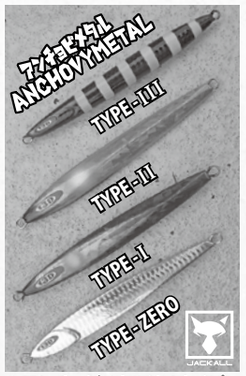
ヨッシーがいつも以上に丁重なアドバイスを送っている間に、ツリガチ取材班のトモキこと板倉友基さんがタチウオを1本上げ、イチロウがエイを釣った。

釣りガールが釣り上がると喜びガチになるツリガチ取材班

8時を過ぎ、進藤船長はこなや丸を走水沖へと走らせる。ヨッシーが、猿島沖でのモーニングタチウオを振り返る。

「群れはいるけど、数は多くないという印象かな。だれかが釣るともう1本釣れるけど、その後が続かないね。活性はもうひとつ、という感じ。

巻きで追ってくるけど、食ってくることは少ない。フォールになった瞬間にジグにアタックしてくるケースが多いから、積



▲アンチョビメタルは4タイプ。当日は沈みの早いTYPE-Ⅰと波動を弱めたTYPE-Ⅲが活躍

◉開始早々、フォールで食ってきた126センチのタチウオ

◀竿先を下げて細かくシャクるワンピッチショートジャークで、ジグを跳ね上げさせないように誘う

ジグはなるべく動かさないほうがいい。ジグが暴れてしまうと、タチウオが口を使いづらくなるからね。